

信 毎 歌 壇

小池 光 選

美術室の外までかほる油絵具吸い込めばと異國にひとり
 青年のわれ見しレパンアツモリソウ群れをなさず
 に咲いてをりたり
 唇そめて桑の美食みしふるさとの子どもの頃の我を恋ひしむ
 気の滅入る我をくぐり引く犬は時折ちりちり後をうかがう
 サイパンに永久に帰らぬ父の居て老いたる今も心忘れず
 草木を日々愛でいし兄の逝く庭のサツキの咲き初めし日に
 短命の家系の中に吾ひとり九十八歳生き居る不思議
 車いすに空気を入れて手のひらに青あざできてなさけなくなる
 梅雨晴れて色つき初めしブルーベリー摘まずに待ちぬ孫娘の帰省日
 ゆうすけは私のこよなく好きな花夕月に開き初めたり
 幾つまで歩きくれば自分から手を繋ぎくる五歳の孫は
 ひびきに妻と旅する旅程表つくれる時間無限にたのし
 (佐久市) 高橋衣里子
 (長野市) 原田 浩生
 (長野市) 近藤 光子
 (千曲市) 石黒 信幸
 (高森町) 原 千世子
 (宮田村) 小田切孝子
 (小諸市) 篠原 昭枝
 (千曲市) 関 津和子
 (坂城町) 横田 徳子
 (麻績村) 塚原ふじ子
 (長野市) 坂口 智弘
 (安曇野市) 細川 恒

第一首、繊細な感受性が生きている歌。わがしの学校生活の思い出だろう。絵をかくことが好きだった。油絵具を嗅ぐとつよく一人の自分が意識されるのだった。第二首、礼文島の花。若いとき北海道旅行をしたのだろうか。ごく簡潔な歌だが格調がある。いかにも爽やかに孤独な青年がそこに立っている。第三首、子どもの頃つまって食べた桑の実。くちびるが赤く染まった。あれから何十年か。

選 評

小島 なお 選

使用済燃料としてぼくたちはプールの底から空を見ていた
 叫ぶ人血を流す人祈る人僕らはそれをクリックしてゆく
 夏服の胸ポケットに僕の名を何度書いても飽きないペンだ
 家に鍵部屋に鍵抽斗に鍵掠奪されたことはまだ無い
 草取りし草を袋に詰め込めば命の水を吐き出して逝く
 火のような腰の痛みに身を起せば首をもたげる半夏生みゆ
 勝つための必死と敗れる必死剛速球の反発係数
 プオープオーとかけ合いをして牛蛙静かな夜を独占している
 供出を余儀なくされて撃たれたる愛犬今年も頭ちて夏来ぬ
 壊されし巢を今一度作りおり燕はスイと入り行きたり
 震度三台風二つ雨続く青に山ありて夜を覚めおり
 青信号急ぎ足にて渡り終え車列にお辞儀へ向かう子
 (熊本市) 夏風かをる
 (千曲市) 石黒 信幸
 (大阪府松原市) なるりすむ
 (松本市) 美甘 歆
 (大町市) 小西 美恵
 (池田町) 小口 美和
 (松本市) 三井 基史
 (長野市) 島田 伶子
 (佐久市) 臼田宇多子
 (岡谷市) 山岡 はな
 (佐久穂町) 石田 弘子
 (岡谷市) 吉池富貴男

選 評

第一首、燃え尽きた青春の1ページのようにも、いまなお作業の続く福島第1原発の現状とも。陰鬱ある社会詠。第二首、デバイス画面の惨劇をクリックする無数の私たちの指にこもるのは祈りであってほしい。第三首、僕のペンは何度も僕の名前を書く運命にある。飽きないのはきっと相性がいいから。第四首、住む国が違えば抽斗の中身も部屋も家ごと掠奪される日常がある。「まだ」の不穏。

米川 千嘉子 選

子の寝息にのしかかること雨音の強まり再びカーテンを開く
 五月病ひきずっている小三を家族みんなで見る七月
 甲種合格就職結婚に有利なり今すぐ「徴兵検査」で検案
 北信の流れ「パンザイ」宴会のしめを教えき小口先生
 木曾駒をめぐる狭霧に少し濡れて深山黒白合咲く濃ヶ池
 「真夜中に異変あったらこれ振って」夫のベッドに鉄風鈴置く
 梅雨晴れに白いアサガオ満開なる帆船のごときアランターかな
 障子貼より手間かかる障子刺さ人世ちよつとこれに似ており
 「あつ既読」この瞬間はふるさとを君がちらりと思った瞬間
 木天蓼は葉の半数を白くして夏が来るぞと告げつつ揺れる
 施設入居にわが家出てゆく離れゆく老いしこの身に万感充ちて
 幼きよりかわいい名前を呼びくれし「かちゃん」我は八十三歳
 (松本市) 堀内 悠子
 (千曲市) 関 津和子
 (上田市) 田名網 剛
 (群馬県高崎市) 福原 政一
 (長野市) 室川 志郎
 (駒ヶ根市) 塩沢 春子
 (伊那市) 赤羽 正彦
 (上田市) 宮崎 拓男
 (松本市) 川村 聡子
 (松本市) 松島 房子
 (阿南町) 佐々木寿美子
 (千曲市) 飛田 一子

選 評

第一首、昨今の豪雨、まして夜中は不安だ。雨の強まる感じを上二句がリアルに伝える。第二首、5月ごろ始まった小3の子の憂鬱や行き波りは改善したのか。家族がその様子を見守っているのが7月というのもリアル。第三首、戦時中の徴兵検査、「甲種合格」に人々が憧れた時代があったのだ。その怖さをアイロニカルに伝える。第四首、長野県で過ごした大学時代を懐かしむ作者。